「モスト・ワースト・ファーストラブ」

瀬戸大希

【あらすじ】

モテたことのない杉山正宗（２５）。趣味や同期とのつながりがなく、友人は大森太のみ。ある日、年収を偽ってマッチングアプリで出会った美女・川崎彩子（２４）とデートすることになるが人生初のデートということもあり大失敗に終わる。

その帰り道、彩子は通り魔に刺殺され、最後を看取ったことで、正宗は彩子の両親から彼氏だと勘違いされてしまう。実際はデート中に彩子は友人の滝口真亜子に「キモイ」「死ね！」などとメールを送っており、最初で最後にして最悪のデートにも関わらず。だが、悲しむ両親を見て本当のことを言い出せない正宗は葬式に出席。後日、勇気を出して真実を話すが、親戚連中の面目もあるため四十九日の法要までは彼氏でいてほしいと説得される。彩子の両親は、娘と一切会話もない自分たちの世間体しか考えていないダメ親だった。

仕方なく彩子の彼女を貫こうとする正宗を

太は「ただの偽善者だ」と止めるが、正宗は助言を無視して彩子の過去を探り始める。最後に会った『彼氏』として、真逆の人生を歩んできた彩子について知りたくなったのだ。すると、彩子は七股をかけて男と遊ぶビッチだということが判明。心がすさんでいく正宗だが「両親の代わりに彼女の話を聞いてあげていた」という5年付き合った年上彼氏に出会い、ようやく安堵する。彼女は親に愛されなかったから寂しかっただけなのだ、と。しかし、この男も体目当てだと知り、思わず手を出してしまう。正宗は、わずか数時間を共にしただけで正反対な生きざまの彩子に同情の思いが芽生えていき、それが愛情に変わる。

四十九日の法要に現れた正宗は参列者の前で彼女の過去や親に愛されていなかったことをすべてさらけ出す。彩子と過ごした数時間を「最初で最後のデートは最高で最愛だった」と言い放ち、死んだ彩子に「好きだ」と告白をする。　（おわり）

【人物関係表】

杉山正宗（２５）　非モテ・サラリーマン。アプリで彩子と会う。

川崎彩子（２４）　キラキラ系の販売員。正宗のデート相手。

大森太（２５）　正宗の同期社員

滝口真亜子（２４）　彩子の友人

川崎孝雄（５２）　彩子の父

川崎加代（５０）　彩子の母

神崎健太（３０）　彩子の元交際相手

大沢富男（７０）　彩子の元交際相手

加山達也（５２）　彩子の元交際相手

轟裕子（５０）　彩子の高校時代の担任

杉山早苗（６０）　正宗の母親

同期男１（２５）

同期男２（２５）

同期女１（２５）

男性Ａ・女性Ａ

救急隊員・キャッチ・ラーメン店店員

○寺・法要会場

大勢の参列者が見守る。

マイクの前に立ち、緊張した面持ちでうつむく喪服姿の杉山正宗（２５）。

正宗Ｍ「想像もしなかった。一度しか会ったことのない、キモいと言われた女性の四十九日で弔事を述べるとは……」

○「ＤＥＡＩ」アプリ・画面

Ｔ「２カ月前」

指でスライドするごとに、次々に表示される女性の写真、プロフィール。

太の声「ないな」

画面下部に「ラブユー」と「グッバイ」の箱がある。

女性が「グッバイ」のフォルダにポンポンと振り分けられていく。

太の声「ない！　ない！　コイツもない！」

スライド、次の女性の笑顔の写真。

太の声「ない！」

○ファーストフード店・店内（夜）

スマホをいじりながら、フライドポテトをほおばる大柄なサラリーマン・大森太（２５）。

正宗の声「そろそろ返せって」

隣には、やせ型の横分けで冴えない感じの正宗。あきれ顔だ。

正宗「面白いか？」

太「さぁね。自分たちがプログラムしたアプリの動作実験だ」

正宗「……どうせ俺の写真とスペックじゃ、向こうからＯＫなんてこないって」

太「爽快！　爽快！　俺みたいなのが、こうやって女を指で淘汰していくんだ、この快感ったらないぜ！（スライドして）グッバイ、グッバイ（がさつに笑って）」

正宗「どんな楽しみ方だよ……」

太「せっかく登録してやったんだから、お前も起きてすぐと寝る前にやれ！」

正宗「朝と夜？」

太「アクセスの多い時間。女とナマケモノは
ヒマな生き物だからな」
正宗「……偏見だろ」
太「経験だ」
太、正宗にスマホを投げる。正宗、な
んとかキャッチ。
太「エンジニアとしてアプリの操作、気にな
らないワケ？　プロじゃないね」
正宗「ま、……ただの仕事だし」
太、ポテトを食べ尽くす。
正宗「俺みたいなモテない男がやったって」
太「そういったマイナス発言がモテない原因
なんだよなぁ」
太、正宗のポテトにも手を付けて
正宗「だったら、そもそも自分のアプリでや
れよ。あと、ポテトも俺の！」
太「とある写真を投稿したら、凍結された」
正宗「どんな写真アップしたんだよ……」
太「俺の大事な――」

○外・ネオン街

キャッチの声「お兄さん！　この後エッチな店、どうです？」

正宗と太、キャッチに声を掛けられ

正宗「……」

キャッチ「いい子、そろってますよ～」

正宗「……（チラリと見て）」

太「もうすぐ俺たち彼女できるんで！」

太、正宗を引っ張って逃げる。

正宗「テキトーなこと言うなよ」

太「アプリを信じろ」

正宗「……あのな」

男女の８人組が通り過ぎていく。

同期男１「結局チリのワインが美味しいんだって！」

同期女１「それ、飲みたい！」

同期男２「じゃあ全員３次会参加で！」

太「出た！」

正宗「……ほっとけよ」

太「俺が一番嫌いな言葉は……同期だ」

正宗「アイツら、俺たちに気づいてもいない」
太「視野、狭いんだよ」
正宗「単なる無視だろ。あいつらは気づかない。俺たちだけは気づき、それに傷つく」
太「韻踏むなよ」
正宗、うつむき
正宗「もういい、帰る」
太「お～～～～！！」
スマホを見て、固まっている太。
太「人魚が針にかかったゾ！！！」
正宗「え！？（スマホ画面に近づき）」
画面を見せる。「ＡＹＡ」という名前の子とマッチングが成立している。
正宗「うそだろ……」
太「そう、努力すれば人は変われるのよ！」
正宗「努力？」

○恵比寿・駅前（夜）
カップルが目に付く夜の繁華街。
正宗の声「ど、どうしよ」

太の声「デートする一択だろ！」
正宗の声「どこに？」
太の声「ディナーだよ！」
正宗の声「店は？」
太の声「うーん、恵比寿とか？」
正宗の声「いや店とか、知らないし。俺なんかムリムリ」
太の声「よし！　デート行ったら２万やるよ」
正宗の声「２万！？」

○同・交差点（夜）

ほろ酔いの正宗、隣にはほとんどシラフの川崎彩子（２４）。コンサバ系ファッションの意識高い系美女だ。並んで信号を待っているが２人には、かなりの間隔がある。
正宗の丸まった背中越しの信号が青に。
正宗、靴紐が解けていることに気づき
正宗「あ。ちょっ……」
彩子「（一瞬振り返るも、無視して）……」

スタスタと行ってしまう彩子。

正宗「あの……」

慌てて紐を結び、彩子の下へ駆ける。

ブラックアウト。

ナニカが刺さる音が数回。

女性Ａの声「キャ〜〜！！！」

男性Ａの声「刺された！　そこの女性が刺されたゾ」

男性Ａの声「犯人だ、捕まえろ！！」

女性Ａの声「誰か、救急車！」

正宗の驚いた顔、アップ。

正宗「！！？」

彩子、お腹と腕から血を流してうずくまっている。

正宗、彩子の下に駆け寄り

正宗「だ、だ、大丈夫……ですか？」

彩子、辛そうに

彩子「最悪……（痛がり）」

正宗、自分のカーディガンを彩子の腕に強く巻き付け、止血する。

彩子の体は痙攣している。
正宗「……マジかよ」
救急車のサイレン。救急隊、急いで駆け付ける。
救急隊員「急いで病院に搬送します。（正宗を見て）同行されますよね？」
正宗「（キョロキョロし）へ……？」
×　×　×
救急隊員、必死に心臓マッサージを続けている。
彩子のコートの中にあるスマホから、ラインの着信音。
正宗「（ハッとし）！」
ポケットから取り出し、スマホのボタンを彩子の親指に触れさせ、ロックを解除。
正宗「（聞こえるように）借りますね。……ご両親に連絡するので」
「真亜子」からのメッセージが来る。
『とっとと帰っちゃいなよ！』キモ男

だったんでしょ？』

正宗「！？」

正宗、震える手で彩子のトーク画面へ。

彩子のメッセージ。

『地獄。この時間クソ！！』

『プロフ詐欺！」

『帰りてぇ。こいつ死ね！』

正宗「！！」

正宗、慌ててラインを閉じる。

正宗「（唖然として）……」

急に救急隊員の手が止まる。

救急隊員「……クソっ！！」

正宗「え！？」

救急隊員「あの……残念ながら――」

正宗「……（目を見開き）」

目をつむって冷たくなっている彩子。

救急隊員「２２時４５分、ご臨終です」

正宗「（驚き）！！」

救急隊員「彼氏さんですよね……。最後に手、握ってあげてください。まだ少し温かいで

すから（泣きそうに）」

正宗「（天を仰ぎ）いや……その……」

救急隊員「（手を導き）ほら」

手を触れようとする正宗。

「真亜子」からのライン着信。

『クソ男の話　早く聞きたい！　合流しよ！』

正宗、触れようとしていた手を戻し、彩子のスマホをコートに戻す。

正宗「……（ためらい）」

救急隊員「ほら！」

チョコンと彩子の指に触れる正宗。

正宗「……」

救急隊員「？」

彩子の遺体を見つめる正宗。

正宗M「そう。俺とこの子の最初で最後のデートは、最低で最悪で……でも……」

タイトル

「モスト・ワースト・ファーストラブ」

○ＩＴ企業「アールネット」・社員食堂（昼）

Ｔ「１０時間前」

広々としたオープンスペースのカフェ風の食堂。

イケメン・美女の男女たちがテラスでワイワイとランチを取っている。

隅のテーブルに座る正宗と太。

正宗「……やっぱり行かなきゃダメ？」

太「最高の大物だぞ？」

正宗「サクラだろ」

太「ウチのアプリにサクラはいねぇよ」

正宗「黙れ、サクラ担当」

太「しゃべる内容を事前に考えておけ。酒には飲まれるな。それから早起きしろ」

正宗「居酒屋の便所の張り紙かよ」

太「大丈夫。お前のアプリに魔法をかけた」

正宗「は？」

○恵比寿・カフェバー（夜）

彩子のラインメッセージ画面。

『最悪』
『地獄』
『コイツ　たぶんこの店初めて』
T「2時間前」
雑貨などが並ぶカフェバー。
正宗「き、き、キレイな店ですね」
彩子「よくいらっしゃるんですよね？」
正宗「……え、ええ」
彩子「やっぱりIT系にお勤めだと、こんな素敵な店、普段使いするんですね」
正宗「え。ええ、まぁ」
彩子、テーブルの下でメッセージを打っている。
『出会って5秒でキョドり出した』
彩子「オススメってあります？　私、ワインすっごく好きで……」
メニューにワインの名前が並ぶ。
正宗「好きなのは赤ですか？　白ですか？」
彩子「私はロゼかな」
正宗「（目を泳がせ）ロゼ？　ロゼ？　ああロ

ぜねぇ」

彩子のメッセージ。

『ロゼ知らないとかワロタ』

彩子「じゃ、正宗さんのおススメにします」

×　×　×

不慣れに赤ワインをゆする正宗。

正宗「（小声で）にげぇ……」

すでに顔が真っ赤だ。

正宗「け、化粧品メーカーの事務でしたら、もしかして化粧品もらい放題？」

彩子「そうですね。このリップもそうです。新作なんですけど、どうかな（唇を見せ）」

正宗「（目を逸らし）……、はい」

彩子「（満面の笑みで）ちょっとお手洗いに」

彩子のメッセージ。

『天気の話、今日３度目』

『唇見て照れるとかキモ』

『アプリの年収欄ウソだろ！！』

『しかもクチャラー』

『ＤＴだろ』

『おまけに酒弱い』

『キングヌーは動物じゃねぇ』

『ジェラピケはパジャマ！』

『帰りたい！』『帰りたい』『帰りたい』

『帰りたい』……と連打。

×　×　×

正宗「（小声で）ジェラピケ……。海外サッカー選手？」

彩子、トイレから戻ってくる。

彩子「私……明日早いんですよ」

正宗「……そ、そうですか」

彩子「（笑って）次会うときはゆっくりと」

正宗「そ、そうですね」

彩子のメッセージ画面。

『ウソでも２軒目誘えよ！』

『ま、行かないけど！』

『死ね』『死ね！』『死ね！！』

〇病院・霊安室（深夜）　〜現在

彩子の死体。シートで覆われている。

○同・同・廊下（深夜）

静まり返った廊下。

椅子に座り、うつむく正宗。

顔面蒼白で落ち着かない様子。

スマホの「ＤＥＡＩ」のアプリを見る。

自身のプロフ欄の「年収」が８００～１０００万円になっている。

正宗「え！　いつの間に……」

慌てて、アプリ自体を消去する。

メール着信音「！」

正宗「！」

そこに「恵比寿の通り魔逮捕」の緊急ニュースが通知。

正宗「……（少し安堵し）」

加代の声「彩子、彩子、彩子、彩子ぉぉ！！」

孝雄の声「加代、落ち着け！！」

霊安室へと猛然と入っていくのは、彩子の母・川崎加代（５０）、父・川崎孝雄（５２）。

正宗、何度も瞬きをし――。

加代の声「ぎゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
孝雄の声「……あ、彩子！」
正宗、唇を噛みしめ、うつむく。
×　×　×
真っ暗な廊下。
加代の嗚咽が続いている。
正宗、深いため息をつく。
加代の声「アナタが杉山さん？」
正宗「あ……」
目が腫れ上がった加代とその体を支える孝雄。
正宗「……は、はい」
加代、正宗の手を握り
加代「ありがとうございます。最後にあの子のこと守ってくれたって……」
孝雄、ゆっくり深々とお辞儀し
孝雄「君が腕を止血してなかったら、もっと早くダメだったろうって……」
加代「あの子の……死に目には会えなかったけど……（号泣し）最後に大好きな人に見

守られて死ねて……それだけは、よかったのかなって（さらに号泣し）」

正宗「……（うつむき）」

孝雄「……分かってる。俺たち以上に君も辛いってことは（何度かうなずき）」

正宗「（目を泳がせ）……いや、その、あの……なんていうか……あの……」

加代、正宗を抱きしめる。

正宗「……え？」

加代「いいのよ。無理しないで。アナタは何も悪くない……。不運が重なっただけ」

孝雄、静かに正宗の肩を叩く。

孝雄「あまり自分を責めるな」

正宗「……」

○同・霊安室（深夜）

彩子のカバン。彩子のスマホが鳴っている。「真亜子」からの電話だ。

「真亜子」のメッセージ。

『ニュースの川崎彩子　別人だよね？』

『ねぇ！』『既読になって！』
『アプリのヤツに何かされた？』
『ヤられた？』
横たわる、彩子の死体。

〇ファーストフード店（夜）　〜翌日
正宗「なぁ俺、どうしたらいい？　何から伝えたらいい？　何を伝えたらいい？　どうしたらよかった？」
対面する太。ポテトをほおばり
太「ほい。２万！」
２枚の１万円札を渡すが、それをはねのける正宗。
正宗「バカか！」
太「落ち着けよ」
正宗「落ち着いてられるかよ！」
太のビンタが飛ぶ。
正宗「イっ！！　……何だよ！」
太「デブの張り手はイてぇモンだ！　とにかく、俺の話を聞け！！」

正宗「……（座って）」

太、２万を拾い上げて

太「いらないのな？」

正宗「いるわけないだろ！」

×　×　×

太「両親はお前のことを彼氏と思っている。

その誤解は解くべきなんじゃねぇか？」

正宗、テーブルに突っ伏し

正宗「……死ぬ前に出会い系アプリで会ったヤツと……最初で最後の最悪なデートをしてたって言えるか……？」

太「全然言えるって！　時間が経てば経つほど、話がややこしくなるだけだ」

正宗「……あの子、俺のことをつまんない、クソだ、死んでほしいって言ってた」

太「しょうがねぇだろ。年収サバ読むから」

正宗「お前が設定、変えてたんだろ？」

太「だまされたほうが悪い。金に目が眩んだ女の肩を持つ必要ないね」

正宗「娘にとっての最後のデートが……最低

でクソだったなんて知ったら……。……あの両親、俺のことをどう思うか……（うつむき）」

太、ポテトを箱ごと、口に流し込む。

太「バカ。（モグモグと）お前がやろうとしてることは偽善だ。ハイパー偽善だ。確かにその子、殺されちゃったかもしれない。でも、初デートで人を『クソだ』『死ね！』呼ばわりするような女だぞ。見せたのか、そのラインの内容？」

正宗、小さく首を振り

正宗「娘のカバンとかスマホはそのままにしたいって。生きていた娘のモノに、できるだけ触れたくないんだって」

太「んで、お前が彼氏設定のまま？　アホらしい……」

正宗「偽善でもいい……。あの両親の泣き叫ぶ声、思い出したら今もさ、辛くて、辛くて……寝れないんだ」

太「俺もアニメ見てて徹夜明けだ」

正宗「……一緒にするな」

フラッシュ。霊安室での叫び声。

フラッシュ明け。

太「（ポテトの底を叩きながら、食べ尽くし）今まで一度もモテてこなかった男が、偽善者ぶろうって？　１００万年早いわ」

正宗「……分かってるよ、そんなこと」

太「で、どうなんの？」

正宗「とりあえず、葬儀は来てくれって……」

太「よし！　そこでホントのこと言え！　自分は彼氏じゃない。そんでもって、アナタたちの娘はクソビッチだって！」

太、再び２万を渡し

正宗「……何だよ」

太「香典にしろ」

正宗「……クソ」

○葬儀場・外観（昼）　～２日後

孝雄「本日はお忙しいところ、娘・彩子の葬儀にご会葬くださり誠にありがとうござい

ます。（〜〜と続き）」

喪服姿の正宗、彩子の遺影を持っている。

正宗「（神妙なそうな顔つきで）……」

葬儀場の遠くのほうに太の姿。

太「なんで親族側にいるんだよ？」

○同・火葬場（昼）

モクモクと白い煙が上がっていく。

親族や多くの友人たちが見守る中、正宗のもとに加代と孝雄が近づく。

加代「ありがとね。正宗君」

正宗「あ……え……？　正宗君って……」

加代「遺影まで持たせちゃって」

正宗「あ、いえ」

孝雄「変な話だがね。将来的に正宗君が挨拶に来ていたら、俺はすぐに結婚相手として受け入れたと思う」

正宗「はい？」

孝雄「君のようなできた人間はそういない」

正宗、戸惑い

加代「あのね……正宗君の未来もあるのは分かってる。……これからたっくさん恋愛していいの。（涙をにじませ）でも、でもね。彩子のこと心の片隅で忘れないでほしいの」

加代、正宗に婚約指輪を渡し

正宗「は……はい？」

加代「娘に付けさせるのが夢でね。ううん、指に付けろなんて言わないわ。持っていてほしいなって……」

孝雄「……（うん、と黙ってうなずき）」

正宗「こ、こ、困ります……！」

孝雄、正宗の手を握り

孝雄「四十九日までででいい。娘の、彩子の彼氏をまっとうしてくれないか……」

正宗「（困惑し）……」

フラッシュ。

太「じゃあそこでホントのこと言え！　自分は彼氏じゃない。そんでもって、アナタたちの娘はクソビッチだって！」

フラッシュ明け。

正宗、大きく深呼吸。

正宗「あの……俺も……。隠してるの辛いんで……これだけ言わせてください」

加代と孝雄、正宗を見つめる。

正宗「その……。あの日のあのデート、初めてのデートだったんです。彩子さんと会ったのは、あの日だけで。だから。お２人の想いは受け取れません……（頭を下げ）ごめんなさい、黙ってて……」

しばしの沈黙。

ゆっくりと顔を上げる正宗。

加代「関係ないわ！」

正宗「（頭を上げ）はい？」

加代「なんとなく分かってたの、それは。でも……結ばれるはずだった２人の最初のデートが、たまたまあの犯人のせいで、最後のデートになっただけの話じゃない」

正宗「（裏返り）はいっ？」

孝雄「最初で最後のデートだったかもしれん

が、最高で最愛のデートだったと思う。……父親の勘だ」

正宗「いや、それは」

加代「彩子のこと、好きだったんでしょ？」

正宗「……え？」

回想。「ＤＥＡＩ」の画面。

マッチングした画面を見る正宗。

正宗「めっちゃかわいい……」

回想明け。

正宗「そう……ですけど」

加代「それだけでいいの、私たちは」

孝雄「（大きくうなずき）」

彩子のメッセージがフラッシュバック。

『今日は外れ』『クソ』『帰りたい』『死ね！』『死ね！』

正宗「……はぁ（困惑し）」

○火葬場・近くのバス停（夕）

はぁとため息をつく正宗、バスを待つ。

真亜子の声「アンタが正宗さん？」

喪服姿の高身長女性・滝口真亜子（２４）、正宗を睨みつけている。

正宗「……はい（怯えて）」

真亜子「滝口真亜子です。彩子の、親友の」

正宗「あ……」

フラッシュ。

真亜子のメッセージ画面のアイコン。

『クソ男の話　早く聞きたい！！』

フラッシュ明け。

真亜子「知らないですよね、私のことなんて？だって……アンタが彩子と会ったの、あの日だけなんだから！！！」

正宗「（うつむき）」

ジリジリと近づく真亜子、正宗は後ずさりをして……。

正宗「……」

真亜子「なんでアンタが死ななかったの？」

正宗「！！」

真亜子「どんな気持ちで遺影持ってたワケ？」

正宗、目を見開いて驚く。

真亜子の強烈な視線。

正宗「ぼ、僕が式に出たのにはワケがあって……ご両親が……」

真亜子「（睨んで）！」

正宗「……（頭を下げて）申し訳ございません。ご両親にすべてホントのこと言いますから！」

真亜子「（食い気味で）ダメ！　絶対ダメ！　アンタ、彩子の彼氏でいてもらえる！？」

正宗「へ……？」

真亜子「じゃないと、困るの」

正宗「え……！？」

驚きを隠せない正宗。

〇正宗のオフィス（夜）　〜数日後

パソコンがズラリと並ぶデスク。

消灯時間で誰もいないなか、必死にプログラムを入力し続ける正宗。

痩せこけてクマだらけだ。

太の声「仕事頑張ってもモテないゾ」

正宗「！」

背後には牛丼弁当をほおばる太。

正宗「……何だ、お前か」

太「どうかしてるぞ。あの日から」

正宗「ほっといてくれ……」

太「俺は、飯を食わない男と自称サバサバ系女が大嫌いなんだよ」

新品の弁当を渡す太。

正宗「……食べないぞ。でもサンキュ」

太「もう一度言う。お前はただの偽善者で被害者ヅラした彼氏もどきだ」

正宗「……」

太「取返し付かなくなるぞ。これも２回目」

去っていく太。

太の声「さ、風俗行こうぜ！」

正宗「（無視して）……」

カタカタと入力を止めない。目はうつろとしている。

○正宗・アパート・玄関（深夜）

家の前、人影が見える。
正宗、近づいていくと加代と孝雄。
正宗「え……なんで？」
加代「あ、正宗ちゃん。（孝雄に）ほら、やっぱりココで合ってたじゃない」
正宗「正宗……ちゃん？」
孝雄「すまんね。こんな遅くに」
正宗「何か……？」

○ファミリーレストラン・店内（夜）
テーブルには大きなパフェが３つ。
加代「ここのパフェね、あの子のお気に入りだったの」
正宗「……はあ」
孝雄「いや……あんなこと言っておいて、我々はあまりにも君を知らなすぎたから」
正宗「はあ……」
加代「正宗ちゃんのこと、教えてほしいの」
孝雄「四十九日の前に君を知っておきたい」
正宗「はあ……」

×　　×　　×

正宗「（ため息をつき）」

正宗のパフェ、手が付かずドロドロに溶けている。

孝雄「なるほど、中学高校と皆勤賞」

加代「偉いわね～」

孝雄「健康優良児だ」

加代「部活は帰宅部で」

孝雄「部活動している男は出世する」

正宗「いやいや。なんか勘違いを――」

正宗、パフェを無理やり口に運び

正宗「あの。大変失礼なんですけど……逆に……彩子さんはどんなお子さんでした？」

加代・孝雄「え」

パフェのクリームがテーブルに落ちる。

ボトボトと――。

加代「かわいかったわよ」

正宗「……かった？」

加代「高校に上がるまでは」

孝雄「私たちが甘やかしすぎたんだ……」

加代「ちょうどこのファミレスに来なくなったくらいね。反抗期っていうヤツ」

○回想・彩子宅・玄関（朝）

女子高生の彩子（当時１６）、制服のまま、朝帰り。

加代「どういうつもり？」

彩子「見たら分かるでしょ……」

そのまま、２階へと上がっていく彩子。

加代の声「それ以来ね、ほとんど会話もないままだったの」

○回想明け・ファミレス

正宗「就職してからも……ですか？」

加代「（うなずき）」

孝雄「恥ずかしながら」

正宗、頭を掻いて

正宗「正直言って、俺なんかより彩子さんのことを知っている人、たくさんいると思うんですけど……」

×　×　×

フラッシュ。

真亜子「（食い気味で）ダメ！　絶対ダメ！
アンタ、彩子の彼氏でいてもらえる！？」

×　×　×

正宗「真亜子さんは？」

加代「……」

正宗「真亜子さんならいろいろと彩子さんの
こと教えてくれると思います」

加代「それが彼女には距離置かれていてね」

正宗「……え？」

孝雄「最後のデートをしてくれた君だけが頼
りなんだ」

加代「ほら、溶けちゃうよ」

正宗「……」

正宗、パフェをむさぼり

正宗「あの……！　なんていうか。俺、彩子
さんのこと好きとかそういう以前に。何に
も知らないんです。赤の他人なんです。彼
氏だなんて……（立ち上がり）もう勘弁し

てください！」

孝雄、フロアで土下座をする。

正宗「え！？ ちょ、ちょっと」

孝雄「四十九日の法要のときだけでいい。親戚連中の前だけ、彼氏でいてくれ」

正宗「（唖然として）……！？」

加代「周りのこともあるの、お願い」

正宗「そんなこと、娘さんは望んで――」

孝雄「この通りだ、頼む！」

正宗「……」

パフェのアイス部分が落ちて――。

ドロドロになったパフェが３つ。

○家近くのラーメン店（夕）

店員が水撒きをしている。

正宗に水がかかり――

正宗「！」

店員「あら、ごめんね」

正宗「……今日はお店、休みですか？」

店員「ああ。閉店。不景気でね」

正宗「……なんか、すみません」

正宗、濡れたズボンを見つめる。

フラッシュ。

血まみれの彩子。

フラッシュ明け。

正宗「（首を振り）……」

店員「（ハンカチを渡し）はい、これ」

正宗「……（黙ったまま、立ち尽くし）」

店員、不思議そうな顔。

○正宗のアパート（夕）

ほとんど荷物のない殺風景な部屋。

ベッドで天を見上げる正宗。

正宗「……ワケわかんねぇ……」

チャイム「！」

正宗「……」

チャイム「！！」

正宗、気だるそうに扉を開ける。

正宗の母・杉山早苗（６０）が立っている。米や土産品を抱えている。

正宗「何で？」
早苗「できたんでしょ、彼女」
正宗「……死んだ」

○ファミレス（彩子の両親と行った店）
正宗と早苗。黙ってうつむいている。
早苗「まぁ……食べて。元気出るから」
正宗「はるばる静岡から？」
早苗「彼女さんのお母様から電話あったの」
正宗「……（唖然とし）」
オムライスとパスタが並んでいる。
早苗「母さんのパスタも食べていいから」
正宗「……いらないって」
早苗「家族なんだから、それぞれ違うモノ頼んだほうが楽しめるでしょ？　私、アンタのオムライス一口もらうわよ」
正宗「……」
フラッシュ。
3つ並んだパフェ。溶けていき――。
フラッシュ明け。

早苗「それが家族の特権」
正宗「特権……」
早苗、オムライスを食べる。
早苗「とろける～！　ほら、とろけるわよ？」
正宗「……いろいろ言わないといけないこと
があるんだけど」
早苗「いい。言わなくてもいい」
正宗「……」
早苗「だけど！　ちゃんとご飯だけは食べな
さい！　元気出るから」
正宗「……。一口もらう」
正宗、パスタを食べ始める。
早苗「初めてだったんでしょ？　彼女？」
正宗「……いや。そうだけど、そうじゃない
ないっていうか」
早苗「（笑顔で）ちゃんと弔ってあげなさい。
あ、エビは私のだから」
正宗「（エビをオムライスの皿にのせ）ほら」
早苗「家族の特権！」

○正宗のオフィス・食堂　～翌日

差し込む陽射し。

正宗「……」

隅の席でうつむいている正宗。

食事は手が付いていない。

テラスからズラズラと同期たちが来る。

同期男１「杉山……だよね？　俺らのこと分かる？」

正宗「……ああ」

同期男２「聞いたよ、ご愁傷様」

同期女１「てゆーか、あのヒウチらも恵比寿いたんだよ！　すぐ犯人捕まってよかったよね～！」

正宗「……」

同期男１「まさか、俺らの同期が関わってるなんてなぁ（ほくそ笑み）」

同期男２「おい、不謹慎」

正宗「……」

同期男１「メンタル、大丈夫か？」

正宗「……」

同期たち、隣に座り出し

同期男２「あの子ってアレだったんでしょ？」

正宗「……（無視して）」

同期男１「ビッチ！」

正宗、うつむき……。

正宗「いいから……テラス戻ってください……。（声を張り上げ）戻れよ！！」

同期たち「！？」

正宗「ここは俺らの居場所なんで」

正宗、睨みつけ――。

○同・デスク

資料を持って、外に出る正宗。

太の声「どこ行く？」

正宗「なんだよ」

太「お前、外に行く仕事なんてできないだろ」

正宗「探し物」

太「アプリのデータ、いろいろといじってたらしいな？」

正宗「……クビになってもいいし」

太「くだらねぇ……。見つかるといいな、探し物とやら」
正宗「……」

○とあるオフィス・ロビー
神崎の声「あんた、犯罪でしょ？」
長身イケメンのサラリーマン・神崎健太（３０）と対峙する正宗。
神崎「個人情報、流出！」
正宗「何度会ったんですか？　彩子さんと」
神崎「あん？　一応付き合ったよ」
正宗「え」
神崎「……けどよ、あいつ。同時に七股してたんだぞ。狂ってるだろ？」
正宗「どれくらいの期間、交際を……」
神崎「あん？　あんまりしつこいとマジで警察突き出すぞ？」

○屋敷・大広間
大沢の声「いやぁ～いい女だったな」

和室で和装の老人・大沢富男（７０）
と話す正宗。
大沢「知り合いがあてがってくれたんだけど、
ほんとスケベな女だったよ」
正宗「アプリじゃないんですね……」
大沢「さぁね。あてがわれただけだから」
正宗「……」
大沢「あんたもその口？」
正宗「あの。彩子さんはどんな子でしたか？」
大沢「（笑い）スラッとしてるのに、意外とボ
インでね。いい女だったよ」
正宗「……」
大沢「この間、死んだんだって？」
正宗「……（うなずき）」
大沢、大きなあくびをして
大沢「久々に連絡入れようかと思ってたけど、
残念だねぇ。いい女だったんだけど」
正宗「……」
正宗、拳を握りしめ――。

○大熊女子大学付属高校・校門（夕）
女子高生たちが下校している。
男子高生と落ち合う者も。
キョロキョロとしている正宗。
正宗「（決心を固め、うなずき）」

○同・職員室（夕）
裕子「このたびはご愁傷様です」
彩子の担任だった轟裕子（５０）と話す正宗。
正宗「すみません、急に」
裕子「どんな子でした？」
正宗「……へ？」
裕子「印象に残ってないワケじゃないの。本心を見せない、ずっと黙っている子でね」
正宗「え……？」
裕子「男子高生と遊びに行くくらいが普通というか、ウチはね。でも彼女、そういうタイプじゃなかったから」
正宗「……素敵な子、いや、素敵な女性でし

たよ。彩子さんは……」

裕子「そっか、それはよかった。アナタのおかげかもね」

正宗「それは違うかと……」

裕子「あの子、三者面談で母親とケンカし始めて泣き出してことがあってね……ちょっと心配はしていたんだけど」

正宗「え……」

裕子「四十九日はちょうど三者面談があって行けないのよ。いつかお墓参りは行かせてもらいますね（会釈をして）」

正宗「……」

○道路（夜）

太「おい、死者のストーカー」

正宗の前には手ぶらでジャージ姿の太。

正宗「！」

太「いよいよだな」

正宗「なんでいるんだ、喪黒福造かよ」

太「風俗帰りだ、どうみてもこの格好はそう

だろ？」
正宗「……知るか」
太「元カレを訪ね回って、あげくは母校まで向かう。激ヤバサイコストーカーだぞ？」
正宗「……。確かめたいんだよ」
太「今、確かなのはお前が変態ってことだけ」
正宗「……ほっとけよ」
太「俺が風俗帰りだってことも見極められないヤツが死者の魂探るマネするな！　（喪黒福造のように指差して）ドーン！」
正宗「……」

○恵比寿駅前・ロータリー（夜）
真亜子の声「どういうつもり？」
正宗「！」
真亜子と対峙する正宗。
正宗「な、何が？」
真亜子「彩子が遊んでいた男のところ、回ってるでしょ」
正宗「……まぁ」

真亜子「余計なマネしないで」
正宗「そんなんじゃ」
真亜子「じゃあ、なんで？　マジ意味分かんないだけど……」
正宗「分からないからです」
真亜子「は？」
正宗「僕、彩子さんのこと何も分からないから、いろいろ知りたくて」
真亜子「意味不明！」
正宗「四十九日の前に知っておきたいんです」
真亜子「（睨んで）ふざけてんの？　何？　彩子がビッチで、男から金をまきあげてたこと調べて、四十九日に晒そうって？」
正宗「……違います。ただただ、知りたいんです。僕、彩子さんに最初で最後の最悪のデートをさせてしまったんで……」
真亜子「（首を傾げ）……あんた、やばいね」
正宗、真亜子に迫る。
真亜子、後ずさりして――。
正宗「彩子さん、どんな子でした？」

真亜子「……正直あんまり知らない。なんであんなにハイスペなのに、あんなに男をとっかえひっかえして遊んでたとか……あの子の気持ちとか……よく知らない」

正宗「……」

正宗、深々とお辞儀をして立ち去る。

正宗の丸まった背中越しに――。

真亜子「ねぇ！」

正宗、振り返る。真亜子、遠めから

真亜子「彩子ね、長い間付き合ってた彼氏いたと思う。……私には話してくれなかったけど」

正宗「！」

事故現場に花束が並んでいる。

正宗「……（目を逸らし）」

○高層マンション・エントランス（夜）

スーツ姿の中年男性・加山達也（５２）が入ってくる。穏やかそうな外見。

正宗の声「こんばんは」

加山「？　こんばんは。ん！？」
正宗「彩子さんの――」
加山「ああ。……入って」

○同・加山の部屋（夜）
殺風景だが広いリビング。
立ち尽くす正宗と加山。
加山「５年かな。付き合っていたのは」
正宗「……あの」
加山「誤解してると思うけど。彼女は遊び人なんかじゃないよ」
正宗「！」
加山「ただ、家族とうまくいってなくて……寂しかったんだと思う」
正宗「（真顔で加山を見つめ）」
加山、ソファに座って
加山「彩子の父親と同じ歳なんだよ、俺。彩子、ホントは両親に愛されたかっただけなんだよ……」
正宗「……」

加山「でも、素直じゃないからさ。親代わりってやつ……」

正宗「……彼女、どんな話を？」

加山「仕事のこととか友達のこととか、もちろん親のことも。たまに笑うとかわいかったなぁ」

正宗「（驚きつつ、うつむき）ちょっと安心しました」

加山「？」

正宗「すみません、俺なんかが最後のデート相手で……」

加山、正宗の肩にそっと手を置く。

正宗「……ホントすみません」

加山「セックスした？」

正宗「は？」

加山「彩子にいろいろしてもらった？」

正宗「……え……」

加山「すごかったでしょ？」

正宗「……彩子さんとは……どうして付き合っていたんですか？」

加山「カラダ目当て」
正宗「……え……」
加山「面倒な女と付き合う理由なんて、それしかないでしょ」
正宗「……」
正宗、うつむき
加山「どした？」
正宗、加山に平手打ちを食らわす。
正宗「（自分で驚き）！！」
加山「何すんだよ！」
正宗「アナタ……父親代わりだったんじゃないんですか！？」
加山「バカか？　愛なんかあるワケないだろ、あんな女」
一瞬の沈黙。
正宗「僕は手も繋げませんでした」
加山「知るか、出ていけ！」
正宗、拳を強く握ったまま――。
正宗「……」

○恵比寿駅・ロータリー・事故現場（夜）

花やお菓子を見つめる正宗。

正宗「……わかんねぇよ……わかんねぇよ。（語気を強めて）結局、結局何にもわかんない……」

正宗、目に涙を浮かべる。

正宗「あの日……ただ一緒にいただけなのに……」

花を一つ掴んで――。

正宗の声「……俺は」

正宗、泣いて

正宗「俺なら幸せにできました」

正宗、決意の表情を浮かべる。

○寺・法要会場

曇り空。大勢の参列者が見守る中――。

喪服姿の孝雄と加代。

マイクが立てられている。

加代「お父さん、お願いします」

孝雄、ゆっくりと進んでいく。

正宗の声「ちょっと待った！！」

マイクの前に立つのは、喪服姿の正宗。

孝雄・加代「！」

驚く参列者たち。

真亜子「な、なんで……」

正宗「皆様、本日はお忙しい中、亡き彩子の四十九日法要にお集まりいただきまして誠にありがとうございました」

正宗、大きく深呼吸し、丸まった背筋ピンと正す。

正宗「ご両親に変わりまして、最後のデートをした私から皆様へ一言お伝えしたいことがあります」

孝雄・加代「……」

正宗「彩子さんは亡くなる前、私のことを死ね、死ね、と思っていたそうです」

孝雄、驚き。

正宗「彩子さんは七股をしていました」

佳代、驚き。

正宗「金をくれるパパもいました」

一同、騒然としている。
真亜子「アイツ……」
真亜子、飛び出そうとするも、腕を掴まれる。
真亜子「？」
真亜子の腕を掴んでいるのはジャージ姿の太。ニヤリと微笑む。
真亜子「やめて！　止めさせないと」
太「……そんな資格あんの？」
真亜子「……（たじろいで）」
太「俺の同期はバカだけどな……」
正宗「彩子さんはご両親に愛されていませんでした」
孝雄・加代「！！」
加代、うつむき――。
太「（笑い）いや……ただのバカだ」
正宗「彩子さんが一番嫌いだったのはいつも行っていたファミレスだったと思います」
加代「……」
正宗「たぶんですけど……同じパフェを食べ

るより、違うメニューを分け合いたかったんだと思います。家族ってそういうモンだと思います……いや、そういうモンです」

孝雄と加代、顔を見合わせ

孝雄「……」

加代「……（うつむき）」

正宗「でも（声が裏返り）」

一同、見つめ

正宗「だけど――彩子さんはご両親のことが好き、でした」

孝雄「！」

加代「……彩子」

真亜子「……（唖然とした表情で）」

雨が降り始める。天を仰ぐ正宗。

正宗「彩子さんはたくさん恋をしてきました。抱かれていました。皆さんがめっちゃ引くくらい。すごいエロい女です」

マイクを握りしめる。

正宗「でも。でも、そんな彩子さんが出会った男の中で俺が彩子さんのことを……一番

好きだった自信があります」

孝雄「（驚いた顔で）」

加代「……」

正宗「どんな人よりも、誰よりも！」

真亜子「（驚いて）……」

正宗「彼女の気持ちが分かるのは自分だけだと思っています」

ざわつく一同。

正宗「たったの一度しか、会ったことはありませんでしたが――」

外、落雷が鳴る。

正宗「（涙が溢れて）あの日は、２人で会った最初で最後のデートは……最高で最愛のデートでした」

深々と挨拶をする正宗。

どよめく一同。

唖然としている孝雄と加代。

苦笑いの太。

太「いい弔辞だなぁ」

外の雨が強くなっていく。

正宗、背を丸めて

正宗「（笑顔を作って）彩子さん、大好きです」

正宗、雨の中をがむしゃらに走り去っていく。

涙をこらえて叫び――。

（終）